

外国人研究者招へい事業（短期）報告書 [S-15082]

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
環境・地質研究本部
環境科学研究センター自然環境部 宇野裕之

【背景】

わが国では、1980年代以降、全国各地でニホンジカやイノシシの個体数が爆発的に増加、分布が拡大し、農林業被害や交通事故の増加、国立公園等における植生破壊や土壌流出が大きな社会問題になっている。ツキノワグマは、九州で絶滅したと考えられ、西日本では個体数が減少し絶滅危惧種となっている。一方、東日本のツキノワグマや北海道のヒグマでは人身事故や農林業被害が生じている。これらの人間と野生動物との軋轢を減らし、生物多様性の保全を図っていくための基盤となる、我が国の大型野生動物の生態学や保全生物学については研究体制及び成果ともに脆弱と言わざるを得ない。

本事業では、第一に、第5回国際野生動物管理学会（IWMC2015）においてシンポジウムを開催し、国立公園における大型野生動物の保護管理について議論を行うことで、欧米とは異なる文化圏のアジア地域における保護管理について新たな考え方を創出すること、第二に、現地視察、タウンミーティングやセミナーを通じて、招へい研究者と高校生・大学生・地域住民との交流により、次世代を担う者への教育普及を行うこと、を目的とした。

【概要】

平成27年7月25日：来日

7月26日～30日：第5回国際野生動物管理学会（札幌市）

シンポジウム「知床国立公園における野生動物の保全と管理」で講演を行う。

7月31日～8月3日：知床国立公園におけるフィールド視察・タウンミーティング等に参加（斜里町及び羅臼町）。

8月4日～5日：視察のまとめ、ワークショップの準備

8月6日：ワークショップ「野生動物管理と疾病の管理」（札幌市）

8月7日：帰国

【研究実施の内容と成果】

（1）第5回国際野生動物管理学会

大型有蹄類個体群のモニタリング、個体群動態、シカ類と森林植生の関係、大型食肉類個体群の保全やモニタリングなどの分野において、様々な課題について議論した。

特にSession54「知床国立公園における野生動物の保全と管理」では、知床国立公園のエゾシカの管理と植生回復、ヒグマの保全と軋轢管理、イエローストーン国立公園の有蹄類（エルク、バイソン、ビッグホーンシープなど）の保全と管理、グリズリーの保

全と個体群の回復、シホテ・アリン自然保護区の大型哺乳類の保全（特にアムールトラのモニタリングと保全）に関して発表があり、有蹄類個体群の人為的管理（個体数調整）と自然調節の考え方、オオカミ再導入後の有蹄類個体群の反応、保護区内外におけるヒグマ（グリズリー）の個体群維持（回復）及び軋轢の管理、管理の実施主体などについて活発な議論を行った。特にイエローストーン地域では、国立公園とその隣接地域を含む Greater Yellowstone Ecosystem(GYE)を設定して、国立公園局と州政府が連携して広範囲に移動分散する大型野生動物の保全と管理を行う先進的な事例が紹介され、今後の北海道のヒグマ・エゾシカの保護管理に大きな示唆を得ることができた。

（２）フィールド視察及びタウンミーティング

斜里町の知床五湖地区及び羅臼町ルサ地区において、ヒグマによる事故防止と利用（観光及び自然観察）の調整手法、人家におけるヒグマ対策（広域の侵入防止柵と電気柵）、エゾシカの個体数調整手法の実際について学んだ。また、増えすぎたエゾシカの個体数調整を行っていない斜里町ルシャ地区では著しく劣化した植生と、その影響によるヒグマの栄養状態の悪化、漁業者とヒグマの共存の状況などを学ぶことができた。

タウンミーティングでは、イエローストーン周辺地域のグリズリーの保全と軋轢管理の方法について発表が為された。続いて視察に同行した斜里高校・羅臼高校の高校生による地元での取り組みの紹介を行った上で、質疑を行った。高校生にとっては一流の研究に接し、自身の取り組みに対する評価を得ることで、大きな刺激を得たのではないかと考えられた。

（３）ワークショップ

ワークショップ「野生動物管理と疾病の管理」では、北海道大学及び酪農学園大学の学生、北海道立総合研究機構、道立衛生研究所や森林総合研究所などの研究者が参加、イエローストーン地域のバイソンの保全の歴史、野生動物が持っている疾病（人獣共通感染症）とそのサーベイランス（監視）、遺伝的研究による野生動物と家畜間の病気の相互感染、研究成果に基づく科学的な対策などの紹介が為された。また、北海道のダニ媒介性の疾病や E 型肝炎に関する研究、個体群管理の現状と課題について紹介を行い、持続的な資源利用における疾病のサーベイランスの重要性などについて議論を行うことができた。

【その他】

タウンミーティングに関する北海道新聞の記事(平成 27 年 8 月 3 日)を添付する。

野生動物との共生は

知床 米研究者らと会合

【斜里】いずれも世界自然遺産の知床と米国のイエローストン国立公園の関係者によるタウンミーティングが2日、オホーツク管内斜里町で開かれ、約70人が人と野生動物の共生について考えた。



知床の遺産登録10年を記念した事業で、実行委主催。二つの遺産地域は、観光利用やクマと人とのあつれきなど共通点が多く、研究者らが交流を続けているが、シンポジウムなどの開催は2005年以来となる。今回は7月下旬に札幌で開催された第5回国際野生動物管理学会議で共同シンポジウムを開いた。その後、カリフォルニア大名教授のデール・マッカーロー氏などイエローストンの研究者3人が知床へ視察に訪れていた。

まず米地理研究所上席野生動物研究員のフランク・メイネン氏がイエローストンのクマの保護管理を解説。次に斜里高と羅臼高の生徒が知床に関する学習の成果を報告した。続く意見

交換会で、米野生動物保全協会のキース・オーネ氏は「今後知床では、生態系を守ることに焦点を当てたエコツーリズムを推進すべきだ」と助言した。メイネン氏は高校生からの質問を受けて「餌付け禁止など観光客への普及啓発でもっとも有効なのは、公園を管理している人から直接話を聞くことだ」と答えた。

北海道新聞(朝刊)